



2018 年 (平成 30 年)
12月号 (No. 883)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

平成30年度年次晩餐会を開催、 記念講演会や特別展示には 皇太子殿下のご臨席を賜る

平成30年度年次晩餐会が12月1日、東京・新宿の京王プラザホテルにて開催され、全国からの出席者は489名を数えた。恒例の記念講演会は5部構成で、作家・夢枕獏氏の講演、秩父宮記念山岳賞を受賞した小崎尚会員による記念講演、セロ・キシュトワールなどの海外登山報告と続き、充実した内容だった。講演会や特別展示には、皇太子殿下のご臨席を賜り、お楽しみいただいた。

■会長挨拶 「山岳会の新たなビジョンを」

会場には日本全国の名山の名が付けられた52のテーブルが並び、出席した489名の会員およびその同伴者がテーブルに着いたところで開会となった。

会の冒頭、小林政志会長より次のような挨拶があった。

「今年の8月11日は、鳥取県の大山で第3回『山の日』記念全国大会が開催された。山の日には行政面では定着してきているが、現状がゴールではなく、これから山の日をテコに山や自然に触れ合う人々のすそ野を広げていくことが当会の役割である。そのためにも全国33支部の方々には引き続き、家族

目 次

平成30年度年次晩餐会を開催、 記念講演会や特別展示には 皇太子殿下のご臨席を賜る ……	1
追悼 松田雄一さんを偲ぶ ……	5
西稜からのチャムラン登頂は6400mで断念 ……	6
「第18回ライチョウ会議新潟妙高大会」報告 ……	8
創立60周年記念事業で台湾・玉山へ ……	10
第2回横有恒碑前祭を風師山で開催 ……	11
東西南北 ……	12
活動報告 山行委員会／ 年次晩餐会記念懇親山行 ……	14
支部だより ……	15
東九州支部	
新入会員 ……	16
図書受入報告 ……	16
図書紹介 ……	17
会務報告 ……	18
ルーム日誌 ……	19
会員異動 ……	19
編集後記 ……	19
▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間 月・火・木 …… 10～20時 水・金 …… 13～20時 第2、第4土曜日 …… 閉室 第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時 年末年始休業12月29日～1月6日	

登山の推進や山に関するイベントなど草の根活動を実施していったきたい」

「会の運営には、会費とともに、寄附の受け入れが不可欠である。今年、厳しい審査を経て、当会は紺綬褒章受章の推薦ができる公益法人として認定された。今後も寄附をしてくださった方々へ報いる制度の充実を図り、会内外からの寄附の受け入れを推進したい」

「多くの方に寄附をいただくには、これからの日本山岳会はどうあるべきか、立ち位置を明確にしなければならぬ。そのためには新たなビジョンの構築、120周年記念事業の具体化を進めていく」

挨拶の終わりに皇太子殿下のご臨席に、ご臨席いただけなかったが、

会に先立って行なわれた講演会と特別展示はお楽しみいただいた」との報告もあった。

■物故会員は71名

続いて物故会員への黙祷を行なった。昨年11月末から今年11月末までに亡くなった会員は71名。

名誉会員の大塚博美さんは、1954、56年の第2次、第3次マナスル登山隊に参加。1970年のエヴェレスト登山隊では登攀隊長を務めた。さらに1988年の



小林会長から秩父宮記念山岳賞を授与された小崎尚会員(右)



新入会員代表として元気に挨拶した松尾みどり会員

推進した。大久保春美さんは1976年の日本・インドの合同女子ヒマラヤ登山隊、1980年の日本山岳会ガルワール・ヒマラヤ女子登山隊に参加。障がい者スポーツの世界でも大いに活躍された。

■新永年会員は44名

平成30年度の新永年会員は44名。そのうち奥村邦夫、津田文夫、中島忠、塚原賢勝、太田五雄、小岩清水、室光子、小川務、田上敏行、辰巳賢一、西田哲彌会員ら11名が晩餐会に出席し、壇上で小林会長から一人一人に永年会員バッジが授与された。

■秩父宮記念山岳賞は小疇尚会員が受賞

平成30年度の秩父宮記念山岳賞は、明治大学名誉教授の小疇尚会員が受賞した。業績は「日本の山岳景観に関する研究」で、壇上で表彰の楯と副賞が授与された。

挨拶に立った小疇尚会員は、「恩師の岡山俊雄先生が、この賞の前身である秩父宮記念学術賞を1981年に受賞している。自分は高校生のころ、岡山先生の書かれたものを読んで、『大学でこの先生

について勉強しよう』と明治大学に進学し、今日まで山を楽しみながら研究を続けてきた。今回の受賞で、岡山先生の学恩に報いることができ、大変嬉しく思っている」と語った。

■新入会員は255名

今年度は正会員150名、準会員105名、合計255名を新入会員として迎えた。晩餐会にはそのうちの22名が出席。代表して挨拶に立った松尾みどり会員は、冒頭「この場に立つのは2度目なんです」と述べた。実は昨年度の晩餐会では準会員として出席し、「準会員として過ごした1年間で、様々なリーダーの方と山に登り、敷居の高かった山登りが身近になった。一生懸けて山登りをしていく」という決意が固まったので、正会員になりました」とと正会員になった想いが披露されると、会場からは拍手が湧き起こった。

■乾杯の発声は平井一正会員

「まだまだ山を登りたい」

鏡開きを行なったのは小林会長、森武昭会員、尾上昇会員、齋藤惇生会員という歴代会長に、秩父宮

記念山岳賞受賞の小疇会員を加えた5名。お酒は今年も15代会長・故今西壽雄名誉会員ゆかりの「四海王」をご提供いただいた。

乾杯の挨拶は、記念講演会第2部「チョゴリザ初登頂60周年記念」にもご登壇いただいた平井一正会員。「山登りを始めて70年。今年87歳になりますが、まだまだ山を登りたい」という力強い言葉とともに乾杯の音頭をとった。

その後はテーブルごとに会員同士の交歓を行ない、料理とお酒を堪能した。会の終わりには恒例の33支部の紹介もあり、盛況のうちに閉会となった。

■充実の講演会と特別展示

晩餐会に先立って記念講演会、特別展示、図書交換会などが実施された。

記念講演会は、3つの講演と2つの海外登山報告という5部構成で、充実の内容であった。1部から3部までの講演には皇太子殿下のご臨席を賜った。

平成最後となる特別展示では「明治から平成の登山と日本山岳会」というテーマで、委員会・支部ごとに写真や図書、登山道具など

を展示。資料映像委員会は「近代アルピニズムの幕開け」と題して、日本山岳会の誕生とその歩みを創った人物や、山岳会初期の女性登山家たちを貴重な写真とともに紹介。また、関西支部では藤木九三、四国支部では小島烏水と、それぞれの支部に縁の深い登山家や山に関する展示も興味深かった。展示会場の一角では、チョゴリザ登頂60周年を記念したパネル展示や映画の上映も行なっていた。

講演「山と旅」夢枕獏さん

子どものころから『西遊記』が好きだったことから、玄奘三蔵に興味を持った夢枕氏。玄奘が1300年以上も前にたどった道程を自分でも歩いてみたいと考え、これまでに何度も西域やシルクロードの取材旅行を行なってきた。

玄奘が天山山脈を通過した際に越えたと言われているのが、山脈の最高峰トムール(7443m)の東にあるムザルト峠。玄奘の旅でも最大の難所として知られるこの峠を、夢枕さんは1988年の取材旅行で目指し、岩壁をへつり、氷河の雪解け水が流れる冷たい川を徒渉して進んでいくが、徒渉中に

荷物を流されるトラブルに見舞われて前進を断念した。今回の講演では、そのときの旅の様子が写真とともに紹介された。

様々な文献を読み、玄奘の足跡をたどることで、「なぜ彼はこんな苛酷な旅をしたのだろうか？」と疑問が湧いてきたという夢枕氏。そして、作家の想像力を巡らせてたどり着いた答えが、「玄奘三蔵は心の中に大変な飢え、つまり知的な欲望を抱き、それを満たすために旅に出たのではないか」ということだった。

講演の終盤、夢枕氏は「人間を人間たらしめるものは何か？ 私は『物語を作る能力』だ」と述べた。

「頭の中にすでに物語が作られており、それを実現するために行動を起こすのが人間である。玄奘が旅に出たのも『天竺まで行けば、自分の知的欲望が満たされるのではないか』という物語の実現のためであり、人がエヴェレストに登るのも『あのてっぺんに立ったら……』という物語がまずあり、それを確認するために登っているのではないか。その点で山と旅とは近い関係にあると思う」(夢枕氏)

「チョゴリザ初登頂60周年記念」京都大学士山岳会チョゴリザ登山隊

1958年、桑原武夫隊長率いる京都大学士山岳会隊がチョゴリザ(7654m)に初登頂した。今年はその60周年に当たり、隊員であった平井一正、芳賀孝郎、岩坪五郎、高村泰雄、中島道郎の5氏が一堂に会して記念講演を行なった。

初めに上映されたのは、記録映画『花嫁の峰 チョゴリザ』の短縮版。緊迫感のある登山シーンはもちろん、前年にチョゴリザで遭難したヘルマン・ブルルのテントを発見して遺留品を回収する場面や、ベースキャンプでガッシュブルムIV峰登頂後のイタリア隊と対面して、ブルルの手帳をボナッティに託す場面が印象的だった。

上映後は、登頂隊員であった平井会員が60年前の登山を振り返ったのち、「当時ヒマラヤはまだまだ未知の世界だった。チョゴリザに初登頂できたことで、私の人生はますます未知の探求の魅力に支配されてしまった」「未知に対するワクワク感、困難を顧みず、突き進んでいく冒険心や情熱こそが

人生を豊かにし、ひいては日本のためになると思う」と会場に集まった人々、特に若い世代にエールを送った。

秩父宮記念山岳賞受賞記念講演「日本の山岳景観」小嶋尚会員

日本の山岳景観の代表的な特徴として、「小柄で『繊細』であることが挙げられる。小柄なのは、大陸と違って日本列島が島弧であるため。また、日本の山は壁が細かく、傾斜や方位の異なる斜面が複雑に入り組み、小規模ながら多様に富んで繊細な景観だ。それは日本列島が大陸東岸沖の中緯度に位置してモンスーン帯にあり、気



皇太子殿下もご覧になられた委員会や支部の特別展示



玄奘三蔵の「旅する心」を熱く語った夢枕漠さん

温や降水量の季節変化が大きいことが要因になっている。大陸の東側は西側に比べて気温が低いいため、森林限界が低く、アルプスより緯度と標高が低くても高山帯が現われるという特徴もあるようだ。

日本の冬山に対して「日本海側の山ではドカ雪が降る」「世界有数の豪雪地帯である」と考えている人も多いが、小嶋会員によれば「世界的に見ると必ずしもそうではない」と言う。偏西風帯のパタゴニアやニュージーランド、北アメリカ北部の太平洋岸の山地では日本の倍以上の雪が降り、それが氷河の源になっているのだ。

高山帯に現われる様々な特徴的

な地形(尖峰、岩稜、岩壁、圈谷、岩屑斜面など)は、隆起した山塊が風雨にさらされたり、水の流れ、雪崩や氷河に削られて、長い時間をかけて変化していく。そうした地形を変化させる作用を「地形形成作用」と呼ぶ。

たとえば、尖峰や岩稜、圈谷などで形造られる槍・穂高連峰の景観は、「日本で最も見事なアルプス型氷河地形」と小嶋会員は評する。また、谷川岳や後立山連峰北部には非アルプス型の氷河地形が発達していることを、海外の高山との共通点を挙げながら紹介してくれた。「谷川岳の一ノ倉沢」と「パタゴニアのバイネ」が同じような地形的な特徴を有しているという話は、とても興味深かった。

「ゼロ・キシトワール・エクスペディション2018」報告

鳴海玄希さん

インド・パキスタンの国境紛争で長らく外国隊に閉ざされていたキシトワール山群のゼロ・キシトワール(6173m)。その山の北東壁に日本人によって新たなラインが引かれた。メンバーは鳴海玄希、佐藤裕介、山本大貴の3

名。講演会には鳴海氏が出席して、写真を交えながら壮絶なクライミングの様子を報告した。

アタック前夜の天気予報で天候が悪化傾向だったため、元の計画では「4日で登って1日で下降」だったが、「頑張って2日で登ろう」と変更して出発。1日目に1000mを稼ぎ、標高5700m地点のビバーク地へ。2日目は頂上を目指し、夜間行動の末、22時に頂上到着。すぐさま懸垂下降に移るが、闇と霧のため、深夜2時に行動を打ち切って短時間のビバーク。3日目、ビバーク中に降り出した雪は昼から強まり、危険なスノーシャワーに。夜中まで懸垂下降を続けて、安全な場所を見つけてビバーク。4日目も降雪は相変わらず強かったが、下降を続けて氷河に下り立った。しかし、苛酷な下山はなおも続き、埋没したABCを経て、猛烈なラッセルに苦しみながらBCに帰着したのは、翌々日の早朝だった。

アタック中の3泊すべてを合計しても、睡眠時間は9時間。14時間行動の後、20時間以上の行動が2日続くという、耐久力が試される厳しい登攀であった。

「日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018」報告

日本山岳会青年部の隊としては20年ぶりとなる。ルートは、クレーンブ山群南東に位置するチャムラン(7319m)の西稜。メンバーは登攀隊員の宮津洸太郎(明治大学山岳部OB)と杉原一樹(東海大学山岳部OB)、サポート隊員の佐々木優の合計3名。

キャラバンやメラ・ピークでの高度順化ののちBC入り。10月11日、アタックに出発し、西稜に取り付いて6100mのC1へ。翌12日にはC2入りを目指すが、高度の影響か、6400m付近でメンバー1人の体調が悪化して、意識の状態も不安定になったため、6300m付近で幕営。13日いったんは上部に向かうが、メンバーの状態が依然良くないため、撤退を決めた。

報告の中で、宮津会員は「タクテイクスや山に向かう姿勢など、いろいろな面で甘さがあつた」「今回の登山の経験や悔しい想いを決して忘れず、必ずまた青年部として山に向かいたい」と今後の再起を誓った。

(文・谷山宏典、写真・奥田有恒)

松田雄一さんを偲ぶ

平山善吉

誰よりも日本山岳会を愛し、ともに歩んだ松田雄一名誉会員が今年10月1日、逝去された。享年88。悲しくも寂しいことである。

私が日大山岳部に入った年、松田さんは卒業されたが、同じ工学部で化学を学び、私は建築だった。このためお互いの周辺には共通の先生や知人も多く、大先輩でありながら親しく指導していただいた。松田さんの専門は油脂化学で、卒



松田雄一(まつだ・ゆういち)

会員番号4111

1930年 東京・世田谷生まれ
1947年 日本大学理工学部に入學、同時に山岳部に入部
1952年 同大卒業、日本水産(株)入社
1953年 日本山岳会入会
1954年 日本山岳会第2次マナスル登山隊に参加
1956年 同第3次隊に参加。この年、日魯漁業(株)入社
1959年 日本山岳会ヒマルチュリ登山隊に参加
1970年 同エヴェレスト登山隊に参加
この間、日本山岳会の理事や常務理事、副会長などを歴任
2018年10月1日 逝去、享年88

業と同時に日本水産(株)に入社され、捕鯨母船・図南丸に乗って南氷洋に向かっていた。大阪から船に乗る松田さんは、剣岳にお別れをするんだと言って、いつも富山回りで大阪に向かっていた。当時の日本山岳会是最も輝かしい時代で、マナスルやエヴェレストへの遠征が行なわれ、松田さんはこれらの隊に参加し、多くの仕事をなされていた。これらの遠征では、未踏の頂に立つという晴れがましい記録はなかったが、いつも隊長や隊員から信頼が篤く、請

追

OBITUARY

悼



われて参加されていた。いわば隊の裏方として、なくてはならない存在だったのである。

私と松田さんは、日本山岳会の遠征など、一緒に登山することはなかったが、南氷洋へ向かうまでの春から夏の合宿には、いつも松田さんが参加され、私たちを指導してくださった。私たちは3年生のとき、富士山で雪崩に見舞われ、多くの仲間を失った。仲間を全員見付けるまでには約半年が掛かった。この搜索のときを経て4年生の冬、後立山の縦走を最後に私は山岳部を卒業し、南極へ向かった。

このころ私は、松田さんから山岳会の大先輩、横有恒さんをはじめ多くの人たちを紹介していただいた。これらの人たちには、山登りはもとより、毎日の生き方などもご教示いただいた。私の最も誇り得る時代だったのかもしれない。そのような経緯から、私は26歳で日本山岳会の理事に選ばれた。

ときの会長は松方三郎さん。何も知らない私は、いつも松田さんに助けられながら無事職責を果たすことができたが、これはその後もずっと続いた。私たちのエヴェレスト北東稜遠征、あるいは日本山

岳会会長のときなど、松田さんは決して表に出ず、しっかりと支えてくれた。頭の下がる思いである。

松田さんの業績の一つに、多くの遠征から学んだ登山理論『8000mのタクティクス』がある。これはのちにヒマラヤをを目指す人たちの良き教科書として役立ったと思っている。これと併せて、鶴がヒマラヤを越えてインド平原で越冬するとき、8000mの峠をどのように越えるのか、美しい写真とともにその観察記録をまとめたのが、『ヒマラヤを越える鶴のむれ』である。当時、誰も知らなかった鶴のヒマラヤ越えは、鶴が季節の変わり目に生ずるヒマラヤ周辺の上昇気流に乗って越える現象で、これも松田さんの発見である。

東京にいるときの松田さんは、会社の帰りにはいつも山岳会へ立ち寄り、先輩と交わり後輩の相談に乗っていた。私にとつての松田さんは、山岳会から離れては考えられず、まさに山岳会に生き、山岳会を思う人と言ってよいだろう。今、松田さんを失うことは、まさに巨星墜つ^おの感が深い。ここに改めてご冥福をお祈りいたします。

合掌

REPORT

西稜からのチャムラン登頂は6400mで断念

青年部チャムラン登山隊2018

登山隊の目的と隊員

本登山隊は「高所登山の経験値を高め、さらなる高峰への挑戦につなげる」ことを目的として結成された。また、日本山岳会青年部としては1998年以来、実に20年ぶりの登山隊派遣となったが、この間に途絶えてしまった海外遠征経験の伝承を再び復活させ、青年部の海外登山活動を活性化させることも重要なテーマである。

隊員は発起人である宮津洸太郎(27歳、明治大学山岳部OB、青年部会員)が隊長を務め、宮津とともにチャムランの山頂を目指す杉原一樹(26歳、東海大学山岳部OB、青年部会員)で登攀パーティを編成した。サポート隊員の佐々木優(28歳、関西学院大学卒、青年部会員)は、ベースキャンプで日本との通信と緊急時対応に当たった。

目標はチャムラン(Chamlong)

自分たちの経験と照らし合わせ、目標の山とルートを決める作業がひと冬続いた。条件となったのは、

(1)標高が7000m前半であること。(2)アルパイン・スタイルでアタック可能な登攀距離を持つリッジがあること。(3)隊員の高所経験が少ないため、周辺に十分な順応を行なえる環境があること。(4)あまり登られていない山であること。

この4つの条件に合致したのがチャムランの西稜である。この山は、6kmにも及ぶ長大な頂上稜線と切り立った尾根を持つ迫力ある山容ながらも、わずかな登山隊しか挑んでいない。最も合理的なラインと思われる西稜ですら、1986年の初登以来、2015年まで再登されなかった。また、ベースキャンプに至るキャラバン・ルートの途中にメラ・ピーク(6467m)があり、効果的な順応が行なえるのも好条件であった。

キャラバンと順応登山

9月16日朝、たくさんの方々に見送りに来ていただき成田を出発。9月17日朝、カトマンズに到着。2日間、荷物整理やブリーフィン

グを行ない、19日早朝の国内線フライトでキャラバン起点の町、ルクラに到着した。

ルクラでの準備を済ませ、9月21日、キャラバン開始である。まだモンスーンが開け切らないので、どんよりした天気。午後は雨が降る。キャラバン前半の核心であるザトルワ・ラ(ラは峠の意、4600m)を無難に通過し、反対側の谷に下りると、いきなりキャシャー(6767m)の鋭利な山容が視界に飛び込んできて、ヒマラヤに來たことを実感する。

ルクラから歩くこと7日目、9月27日にメラ・ピーク登山のベースとなるカレ(4900m)の集落に到着。休息と準備に1日を費やし、9月29日、佐々木を含め3人でメラ・ピークへの登山を開始した。初日はメラ氷河上のメラ・

ラ(5300m)で幕営。翌日はハイキャンプ(5800m)まで進んだ。ハイキャンプは氷河の端の露岩帯に造られたテントサイトで、なんと簡易トイレも設置してある。ここまで3人ともほとんど高度障害を感じることなく登ってきており、順調だ。

そして10月1日、全員でメラ・



チャムラン・ベースキャンプにて。頂上から右手前に延びるのが西稜

ピークに登頂。山頂からはこれから挑むチャムランが迫力満点で望めた。その奥にはマカルー、西側にはエヴェレスト、ローツェもはつきり見える。

チャムラン西稜登攀

メラ・ピークのハイキャンプからメラ・ラをカレとは反対方向に下り、ホングー谷の谷底に下りる。ハイキャンプから2日間歩いて10月3日、草原地帯のチャムラン・ベースキャンプに到着した。

1日休息して10月4日、5日はチャムラン西稜下部岩稜帯の偵察を行なった。谷底の4900mから雪稜となる5900mまで続く



6000m付近から見上げた、チャムラン頂上へと続く西稜上部

下部岩稜帯は、今にも崩れそうな岩が堆積し、尾根が入り組んだ複雑な地形でルート・ファインディングが難しく、ルート中一番厄介な箇所だ。数箇所出てくるクライミング・セクションも、ホールドはすべて信用できない。

その後、天候の回復を待ち、10月11日朝6時、アタックを開始した。初日は4900mのベースキャンプから西稜上6100mのC1予定地点まで、標高差1200mを登らなければならない。まずは下部岩稜帯を慎重に登っていく。クライミング・セクションと緩傾斜帯が交互に出てくるため、雪稜

へと変わる5900m地点まではアプローチ・シューズで登った。

下部岩稜帯を抜けると、しばらくは標高差のない雪稜が続く。ルート中、最も快適な区間だが、尾根は細く、下を見ればはるか1000m下まで切れ落ちているため、スノーバーを打ち込みながらの同時登攀で進んでいく。6000mを越えると、アックスを打ち込んで身体を引き上げる動作が辛い。日本でのアイス・クライミングのように連続して行なうと、心拍数が上がって呼吸が制御できなくなる。メラ・ピークの傾斜の緩い氷河歩きでは感じられなかった辛さに、初めて高所クライミングの厳しさを感じた。2時間ほど雪稜を進んだところで、C1予定地である6100mの小ピークに到着。この日の夜は2人とも呼吸が苦しく、あまり眠れなかった。

翌朝、空は高曇りで風が強い。本日が西稜の核心部となる。昨日まで綺麗な雪稜だった尾根は一転、もろい岩と支持力のない雪のリッジが交互に現われる、悪相のナイフリッジに変わった。事前に入手した写真では、この先も綺麗な雪稜が続いていたはずだが、全く景

色が違う。リッジ通しに進むことができると踏んでいた稜線は、数mで雪の状態が変わり、どこを登れば良いか、その都度苦心した。弱点を探して進んでいくが、ビレイ点を含めて確実な支点はほとんど得られない。ピッチを延ばすごとに、確実に肉体的、精神的に削られていくのを感じる。

そして、ナイフリッジが山頂へと続く雪壁に吸収される少し手前、6350m地点で杉原の高度障害が悪化、意識も朦朧とする。今日はこれ以上進めないと判断し、少し下った所にあつたセラック脇でテントをアイス・スクリューで固定し、幕営した。2人とも食欲が出なかったが、無理やりラーメンを流し込んですぐに寝た。

アタック3日目の10月13日、昨日の最高地点まで登り返し、その少し先まで登るも、杉原の高度障害は治まらない。今まで登ってきたナイフリッジは懸垂下降がほとんど使えず、大半がミスの許されないクライム・ダウンになる。杉原の体調は朦朧とし、呼吸も安定しない状態ではあったが、今ならまだ下山できる確証はある。2人で相談し、無念ではあったが64

00mの最高到達点から下降を開始した。

結局、この日はC1まで戻れず、またしてもセラックの陰に平坦地を見付けて幕営。翌日、10月14日、スタカットのクライム・ダウンを繰り返して、15時30分、無事にベースキャンプに帰着した。

予備日をまだ残していたため再アタックを計画したが、キッチン・テントが傾くほどの強風が続き、10月20日のバック・キャラバン開始までチャンスが訪れることはなかった。

登山を終えて

前述のように我々は6400mで撤退、登頂することができませんでした。直接的には、想定よりも西稜の状態が悪かったこと、アタック時の強風、高度障害が敗退の原因となりました。しかしながら、我々隊員一同、今回の登山で得たものを必ず今後に活かしていく所存です。経験の浅い隊員で構成された私たちの登山隊に、日本山岳会会員をはじめ多くのご支援・ご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

(宮津洸太郎・記)

REPORT

「第18回ライチョウ会議新潟妙高大会」報告

自然保護委員会 日吉健治

より転載)

去る10月19・20日、新潟県妙高市の文化ホールと新井ふれあい会館にて18回目となる「ライチョウ会議」が開催され、本部自然保護委員会から計5名が参加しました。

ライチョウ会議は、2000年8月に第1回大会が長野県大町市で開催され、「日本アルプスとその周辺に生息するライチョウに関する情報交換と、調査及び研究の連携を図ること、ライチョウに関する知識の普及と啓発、保護活動に関すること等を行うこと」を目的としています。

年1回開催され(2017年は未開催)、ライチョウ研究者や行政関係者、自然保護団体、山小屋関係者および一般市民が参加し、ライチョウに関する研究成果の発表や情報交換・保護活動への提言、知識の普及等が図られています。

今回のシンポジウムの中から、ライチョウ会議議長を務められる中村浩志先生による基調講演の内容を紹介いたします。

【基調講演要旨】(大会プログラム

より転載)

「ライチョウ *Lagopus muta* は、北極を取り巻く地域に広く分布する鳥である。その中であって日本のライチョウ *L. japonica* は、世界の最南端にぼつんと分布し、北の集団とは完全に隔離され、本州中部の高山にのみ生息する集団である。大陸と陸続きであった最終氷期に日本列島に移り住み、その後の温暖化とともに高山に逃れることで、今日まで世界の最南端で生き延びてきた集団である。北の集団は標高の低いツンドラに生息するのに対し、日本のライチョウは高山に棲み、厳しい日本の高山環境に適応してきた貴重な集団で、国の特別天然記念物に指定されている。

遺伝子解析の結果から日本のライチョウは、南アルプスの集団と北アルプスの集団の2つに大きく分かれ、さらに後者は、北アルプス本体の集団、その周辺の火打・焼山の集団、乗鞍岳の集団、御嶽山の集団の4つに分化しているこ

とがわかった。今から35年前には日本に生息するライチョウの数は約3000羽であったが、最近では2000羽以下に減少しており、以前には高山帯にいなかったキツネ、テン、カラス等の捕食者の高山帯への侵入、シカ、サル、イノシシ等の侵入による高山植生の破壊、温暖化問題など、日本のライチョウは現在様々な課題に直面している。中でも日本で最も絶滅の危険性が高い集団は、火打・焼山の集団である。

火打山のライチョウは日本で繁殖する最北端の集団で、日本最小の集団である。この山にライチョウが発見されたのは、今から66年前の1952年である。その後隣の焼山にも繁殖することが確認されたが、噴火により繁殖が途絶え、最近になり復活している。発見後40年間は、火打山では10なわばり20羽程ですつと安定していた。

2007年からは、火打山で足輪による標識調査が開始され、翌2008年からは毎年の繁殖数が足輪により正確にわかるようになり、隣の焼山でも標識調査が開始された。その結果、火打山と焼山では個体の交流があること、20



新井ふれあい会館前に設置された案内板

09年には北アルプスからの個体の移入により一時的に繁殖数が増加したが、その後は減少が続き、今年の2018年には6なわばり15羽と過去最低であることがわかった。また、火打山は温暖化の影響を最も強く受けており、背の高いイネ科植物等の侵入で、ライチョウの子育て環境や採食環境が急速に悪化していること、さらに2015年からシカやイノシシの侵入が本格化しており、絶滅の危険性が高まっていることがわかった。

今後、貴重な火打山の高山環境とそこに棲むライチョウ集団を守つてゆくには、人が積極的に自然に手を加え、生息環境の改善をは



基調講演でライチョウ保護の重要性を力説した中村浩志先生

かる段階にきている。ライチョウの子育て環境や採食環境に侵入した背の高いイネ科植物の除去、キツネ、テンといった捕食者やシカやイノシシの除去、ケージ保護による孵化後の雛の生存率の向上といった具体的な対策が急務となってきた。

火打山の貴重な自然とそこに棲むライチョウを次の世代に引き継ぐためには、今なにをすべきか、参

加者の皆様と共に考える機会としたい。」

この講演の中では、今回の大会が妙高戸隠国立公園誕生に絡めて開催されたこと、シンポジウムが初めて平日の金曜日に開催されて、地元妙高市の中学生が参加したことについても触られました。

また、日本のライチョウが人を恐れない、世界で唯一のライチョウ類であること、その背景として

日本の里と里山、奥山といった考え方、山岳信仰に基づきライチョウを「神の鳥」として殺生を禁じた文化があったことなどの説明もありました。

さらには孵化後の雛を人の手で守るケージ保護と、キツネやテンといった捕食者除去との相乗効果による生存率向上取り組みの成果を説明していただきました。

一般市民によるライチョウ保護の取り組みの一つであるライチョウ・サポーター制も登

録者が1000人を超え、行政と一般市民と協力して保護に取り組み意義と必要性についても訴えられました。

現在、自然環境を保全するためには、人間の関与を排除し手を付けずにそっとしておく、捕まえない、などといった消極的な手法ではもう守れなくなってきたとおり、そのような時代は終わったことを強調されていました。

危機が迫るライチョウですが、行政と一般市民の協力のできることを今からやっていくべきだ間に合うし、ライチョウを絶滅から守れる、との提言もいただき、今後私たちがなすべきことについての方向性も示唆されました。

最後に、これからは登山者の協力も非常に重要になるとの要望もあり、私たち日本山岳会が率先してそれに応えるべきではないかと感じさせられた講演でした。

2日間にわたってシンポジウムとワークショップが行なわれた今大会は、ライチョウに関する最新の調査・実験結果が関係者のみならず一般市民も聴講できた、貴重な機会でした。

約1000名が参加した1日目

のシンポジウムでは、中村浩志先生による基調講演のほか、高円宮妃久子殿下による世界的な希少鳥類保護活動についての講演や、女優・工藤夕貴さんによる、ご自身の登山体験についての特別講演もありました。

また、パネル・ディスカッションでは、各方面で活動されている4名のパネリストより、それぞれの視点による火打山のライチョウへの意見を伺うことができました。

2日目のワークショップは約300名が参加し、各分野での専門家から学会レベルという最新かつハイレベルな内容の発表があり、域内外における保全の現状と課題など、大変貴重な話を聞く機会を得ることができました。

今大会では専門家や行政による調査・保護活動だけではなく、一般市民による保護活動の重要性も提示されました。筆者も積極的にライチョウ保護の活動に関り、ライチョウを守りたいとの思いを深めた2日間でした。

なお、関連イベントとして10月21・22日に、エクスカーション(火打山ライチョウ観察会)が実施されたことも併せて報告しておきます。

REPORT

創立60周年記念事業で台湾・玉山へ

宮城支部長 冨塚和衛

宮城支部は全国で14番目の支部として1958年5月に産声を上げた。今年でちょうど60年目になるが、その節目の年の記念事業の一環として、中華民国山岳協会の協力を得て、台湾・玉山登山を実施した。

実は、宮城支部と中華民国山岳協会との交流は、40年ほど前から続いている。それは、宮城支部に所属した平沢亀一郎名誉会員（以下、寿翁という）の関りが大きい。寿翁は戦前に台湾総督府に就職し、約30年間の長きにわたり殖産振興の仕事に携わった。その間、台湾の山々に登り、あるときには、仙台の中学で同級だった横有恒（第4代および7代本会会長）とも山行をともにしたこともあった。そして、山を愛する寿翁は、ついには中華民国山岳協会の設立に多大な役割を果たしたのである。

終戦を機に仙台に引き揚げてきた寿翁であったが、引き揚げどきの辛苦から台湾を恨めしく思うこともあり、一時期音信が途絶えて

いた。その後、1962年に中華民国山岳協会の一行が来日したのを発端に、寿翁と中華民国山岳協会の交流が始まった。1974年には、三田幸夫・第11代本会会長の希望で渡台した経緯もある。

宮城支部としての交流は、寿翁と佐々保雄・北大名誉教授（第14代本会会長）が同行した1977年の、北海道支部との総勢26名による合同訪台が始まりである。以来、これまでに計4回訪台した過去があるが、1996年の西郡光昭隊長以下9名による玉山登山以降は交流が途絶えていた。

2016年になり、中華民国山岳協会・張玉龍顧問一行が故田部井淳子氏主宰の「東北応援プロジェクト（福島県・沼尻高原）」に参加したときに来仙、1週間、仙台に滞在し20年ぶりに親交を深めた。来仙したきっかけは、寿翁が手掛けた台湾総督府時代の蓬莱米普及の仕事を顕彰する「竹子湖蓬莱米原種田故事館」が前年、台湾政府により改築され記念館として開設さ

れた折の、宮城県をはじめとする関係者との関りによる。このような経緯から、張顧問の強いお誘いもあり、台湾・玉山登山を実施することとした。

北東アジアの最高峰・玉山は、太平洋プレートとユーラシア・プレートの衝突による褶曲で隆起した台湾島の最高峰（3952m）。台湾を南北に縦断している5大山脈の第2山脈（玉天山脈）に位置する。参加者は、宮城支部会員ら9名と寿翁のお孫さんの計10名。期間は10月9日から15日の1週間。

9日、台湾桃園国際空港で張顧問と林哲全・東亜部長の出迎えを受けて台北市の宿泊先へ。10日、台湾では国慶節の祝日。「竹子湖蓬莱米原種田故事館」を訪問。祝日もかわらず故事館を管理する陽明山・国家公園管理处長から説明を受ける。その後、阿里山へ。

11日、12日、玉山に登る。11日、阿里山から上東埔駐車場まではバスで、そこから歩いて塔々加警察小隊まで移動し、入山手続きを済ませます。シャトル・バスで標高2680mの塔々加鞍部登山口まで行く。ここから林部長のガイドで排雲山荘を目指す。距離にして約



寿翁のピッケルやロープが飾られている山岳協会事務所にて

8・5km、標高差は約7200mの行程だ。11時前に登山口を発つ。登山道は良く整備されている。孟禄亭、前峰登山口、白木林休憩ステーション、大絶壁を過ぎ、17時過ぎに排雲山荘に到着する。約6時間の行程だった。

12日、2時に起床、4時前に玉山山頂を目指す。南峰三叉路を過ぎると岩場の急登が続く。7時過ぎに玉山山頂に到着する。高山病の兆しが見られた者もいたが、参加者全員が山頂を踏むことができた。山頂では太陽も雲間から顔を出し、玉山群峰が雲海に姿を見せ

てくれた。40分ほど山頂に滞在し、来た道を下山する。途中、排雲山荘で昼食を兼ねひと休みする。鞍部登山口には15時過ぎに到着した。約11時間の山歩きとなった。下山後、東埔沙里仙温泉で登山の疲れを癒す。

13日、移動日。14日、夕刻から、寿翁が台湾時代に使用したとされるピッケルやロープが飾つてある、黄榎楠理事長や山岳協会幹部との交流会に出席し親交を深めた。その後、場所を移し、黄理事長主催の晩餐会に招待され、恐縮するほどの歓待を受ける。15日、帰仙する。

22年ぶりの台湾・玉山登山ではあったが、中華民国山岳協会の絶大なるご支援・ご協力により参加者一同にとって思い出の多い、記憶に残る山行となった。これもひとえに、黄理事長、張顧問をはじめとする山岳協会の方々の、親身な接遇の賜物と感謝に堪えない。帰国後、参加者が集い「宮城玉山会」を結成、中華民国山岳協会と宮城支部との交流が次世代に継承されるよう活動を行なっていくこととした。

REPORT

第2回横有恒碑前祭を風師山で開催

北九州支部長 関口興洋

平成30年10月21日(日)、快晴の下、北九州市門司区の風師山(風頭)に設置されている横有恒記念碑と略歴碑の前で、碑前祭を行なった。昨年の第1回碑前祭は台風接近のため風頭での記念行事は中止となり、山麓で午餐会のみ開催した。したがって、今年が実質的に最初の碑前祭となった。横さんの記念碑がなぜ風頭に設置されたのか、経緯をご紹介したい。

1956年、初登頂に成功した第3次マナスル登山隊の隊長を務めた横有恒さんが、初登頂の報告をするため58年、九州の各地を回り、10月、旧門司市にあった毎日新聞西部本社へ支援のお礼の挨拶に立ち寄られた。そのとき風師山早朝登山会の堤甚五郎会長(元日本山岳会会員)が、横さんを関門海峡のすばらしい展望台である風頭にご案内した。当時の感慨を横さんがのちにしたためた詩文を基に、堤さんが記念碑を設置した。

「この頂に立つ 幸福の輝きはこれをとらふる 術を知りし

山人たちの 力によるものなり
昭和三十二年十月 横有恒」

今回の碑前祭には、森武昭・前会長(神奈川支部)、芳賀孝郎・元副会長ご夫妻(北海道支部)、石原國利・東海支部名誉会員、高木莊輔・福岡支部長、佐藤浩幸・永年会員(東九州支部)ほか北九州支部の会員を含め33人が出席。森前会長の来賓ご挨拶、地元の子稚園児2人による献花、池田智彦会員の指揮で「雪山讃歌」の合唱など一連の記念行事が終了後、山麓の「門司俱樂部」に席を移し、午餐会を開催した。午餐会では北九州市門司区の小石区長(関口代述)や石原國利氏、高木莊輔氏より祝辞を賜り、伊藤久次郎・前北九州支部長の乾杯の音頭で開宴した。

午餐会終了後、札幌から遠路はるばる駆けつけていただいた芳賀孝郎氏の記念講演を拝聴した。

登山史研究家の布川欣一氏が「芳賀氏は、古き佳き時代の岳人系譜に直接連なる、おそらく最後尾の存在ではなからうか。それ故に

こそ、その証言は貴重で歴史的価値は高い。」と述べられていること、私どもが感慨に接することができなかつた日本山岳会の横さんをはじめ大先輩の方々の、貴重な興味あふれるお話を数々ご披露していただき、大変有意義な講演会であつた。深謝申し上げたい。

なお、前記の記念碑の日付が昭和32年10月となっているが、毎日新聞社に確かめたところ、昭和33年10月29日付の同紙で「横有恒さん(六十四)が二十八日朝、門司山岳会員の人たちと風師山に登った。……」との記事が残されており、事実は昭和33年10月と判明した。



記念碑前で記念写真に収まる参加者一同

東北 西南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

安曇野アートライン

「山岳画の魅力語る」

小原茂延

芸術の秋、安曇野の「山岳画の魅力語る」シンポジウムを数日前に知った。行楽の秋、久しぶりの好天予想、指定も取れぬまま千葉発の「あずさ3号」に錦糸町から乗ることで、やっと席を確保できた。

秋分の日である当日はよく晴れ渡り、甲斐の山々がまず迎えてくれる。諏訪、塩尻で北アルプスの鋭鋒が雄姿を見せ、心躍る眺めだ。そして常念岳から爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳！これだけでも安曇野を訪れる価値がある。中村屋の創業者、相馬黒光がはるばる仙台から嫁してきた地でもある。

今回の会場は、信濃松川駅下車、松川村の「すずの音ホール」で

開催された。「安曇野アートライン」とはパンフレットによると、日本の屋根・北アルプス山麓に広がる「安曇野」の地に点在する美術館・博物館をラインで結んだもので、安曇野市から白馬村まで約50kmの地域に約20館ものミュージアムが並ぶという。安曇野山岳美術館、田淵行男記念館、安曇野ちひる美術館、碌山美術館、北アルプス展望美術館、大町山岳博物館、白馬三枝美術館等々が名を連ね、毎年持ち回りで、その地域の自治体と連携して開催するという。信州人の文化、教育に対する情熱の表われであろう。今回は迎えて第14回の開催である。

さて、今回のテーマ「山岳画の魅力語る」シンポジウムにおけるコーディネーターは小林明氏。信濃美術館副館長、ヘンリー・ミラー美術館長、98年6市町村を含め

た安曇野アートライン推進協議会設立に奔走し、現在、事務局長の方である。パネリストとして木版画家の杉山修氏。吉田博の息子遠志孫の司に師事し吉田版画アカデミーに属する。日本山岳画協会員、日本山岳会会員で各種の賞を受賞している。同斎藤郁夫氏。山口県立美術館副館長、「巨匠が描く日本の名山」（1997～99年、松本市の郷土出版社）に作品解説執筆と編集を担当、2016年に松本市美術館と「遙かなる山発見された風景美」を連携開催するなど、山岳風景画の研究者として名高い。同

滝澤正幸氏。信濃美術館、上田美術館館長などを経て現在、上田市立博物館館長、中世―現代美術史研究、山岳画の著書多数といった豪華な顔ぶれで、山岳画の魅力を語ってくれる機会はまたとない好機であった。なお、討論で紹介する山岳画には、当会所蔵の茨木猪之吉作「秩父槍岳」（秩父市中双里）や安曇野周辺の館に寄託している作品も合わせ紹介（一部は会場展示）されており、山岳絵画の歴史に残る名画に出会うことができた。

討論では山岳画の歴史、定義に始まり、ラスキンの影響などから

説き起こし、近代の登山とともに歩み、登山家であり画家としての先達の探検時代から、1911年に日本山岳会の展覧会の開催をみたこと、それから25年後に「日本山岳画協会」の誕生に至った。その主旨とするところは、中村清太郎の「山を好んで描く人たち」という広義のものから、足立源一郎の言う「真の山の靈氣に触れる画は岳人であれ」といった狭義の考え方があったようである。ともあれ、貴重で濃密な山岳絵画論を聴くことができ、有意義な一日であった。

宮崎ウエストン祭に 寄せて

田上敏行

第34回宮崎ウエストン祭が、11月3日、祖母山を間近に望む高千穂町五ヶ所の三秀台で開催された。午後4時から式典が行なわれた後、近くの公民館に会場を移して交流会が開催され、九州在住の会員約60名が会場に泊まって、酒を酌み交わしながら歓談した。記念祭は、ウエストン師への顕彰もさることながら、九州地区に住む会員にとって年に一度の親睦の場となつて

いる。

宮崎ウエストン祭のきっかけは、明治23年11月にウエストンが祖母山に登った事実が五ヶ所地区の庄屋・矢津田鷹太郎の日記（矢津田日記）で確認されたことによる。日記には「十一月六日晴天 英人シヨンフランドラン君及び神戸在留同国人エストン氏同道ニテ祖母岳登山 往復共立寄ラル 河内泊ノ由也」と記されている。

1891年に発行された『Handbook for Travellers in Japan（日本旅行案内）』第3版には、このときの登山を基に書いたと思われる祖母山の紹介記事があり、矢津田日記と併せて読むと登山の様子が



左側の軽自動車のある付近が鍛冶屋跡。右側の石垣の上に鍛冶屋の土蔵があった

よく分かる。シヨンフランドラン君とあるのは熊本聖公会のジョン・ブランドラムのことで（詳細は『山岳』1133年を参照）、九州東岸部への布教ですでに矢津田氏とは面識があったので、初対面のウエストンと呼称を区別している。当時の矢津田邸は現在の五ヶ所小学校の西向かい側にあった。

矢津田日記の末尾にある「河内泊」とは、当時、河内にあった「鍛冶屋」に泊まったことを指し、『日本旅行案内』にも「kai-ya」と記されている。鍛冶屋の家は、幕末には7ヶ町村の大庄屋で比較的大きい

建物だったらしく、明治20年代初めのころは、聖公会の人たちの休養地として利用されていた。

ウエストン祭の帰りに鍛冶屋の跡に寄ってみた。第二河内橋（明治橋）のすぐ西側にあった建物は普通の民家となっており、その向かい側にあった別棟の土蔵も土台の石垣だけが当時の面影を残しているだけだった。

『日本旅行案内』には、ここから祖母山まで、登り5時間、下り4時間半で往復した様子が記されており、ウエストンがかなりの健脚であったことがうかがわれる。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会

あこがれの馬蹄形縦走

谷川連峰・朝日岳と白毛門

10月12日〜14日、2泊3日で今話題の群馬県と新潟県の県境稜線トレイルを9名で歩いた。

リーダーは三枝さん、サブリーダーに数見さん。そして東京の高橋、杉崎、静岡支部から大島、赤堀、北海道から大畑、埼玉からは私、そして準会員の田口の皆さん。1日目は足慣らしの吾妻那山。集合の上毛高原駅からタクシーで

大峰沼入り口登山口へ行き、登り始める。先日の台風によるものか倒木が多い。跨いだり、潜ったりと歩きづらい。展望台らしき木の建築物の下を通り大峰山へ。吾妻那山の山頂で昼食。風があり冷えてくる。リーダーに「時間にゆとりがあるから、ゆつくり食べてください」と言われるが、早々に身支度をする。スキー場ゲレンデの横を通り、また大峰沼のほとりへ。後は30分ほどで登山口に到着してしまいうので、迎えるタクシーに早めに来てもらうよう連絡する。

なんと1時間半ほど早く着いてしまった。私は知らなかった！リーダーの三枝さんが歩くのが早いということ。明日からに不安を覚えた1日目だった。湯檜曾の民宿で6時半の夕飯まで、親睦を兼ねた飲み会。自己紹介などを交えながら、山の話で盛り上がる。

2日目は早立ちと思いきや、電車に合わせてゆつくり。新幹線の開通で、在来線がすごく不便になったとタクシーの運転手さんが言っていた。2駅先の土樽から歩き始める。茂倉新道を通り、茂倉岳・武能岳と進む。写真で見ているササの中の稜線歩きが楽しめる。

かと思っていたのだが、霧で展望が利かず、ただ登ったり下ったり途中、霧が晴れたときに蓬新道の稜線が左手に見える。あのコースも歩いてみたいと思いながら、前方に何かが見える！と思ったら色とりどりのテントで、もう蓬ヒュッテに到着。でも、今日はコースタイルよりちよつと余分に掛かつて4時半過ぎに到着。着いたらもう夕飯。水のない山小屋で決まりのカレーライス。ほかにはラッキョウと福神漬。小さな小屋で私たちはロフトのような2階で休む。ここも寝袋と毛布で。夜中、風の音で目が覚める。テントの人たちは寒くないのかなあと思いがら、また眠る。

3日目、今日もまだ霧が深い。雨衣を着て5時半過ぎに出発。思い描いていたような稜線歩きの景色に会えない。途中少し霧が晴れてこれから登る谷川連峰・朝日岳のそびえ立つ姿が見える。えっ！あれを登るの。もう、草原ではなく岩と松。晴れ間から周囲の山々が見える。ダケカンバの白い樹形と草紅葉とササ原。まるで日本画の世界。「今年の紅葉はイマイチだね！」の声を聞きながらも、きれいな景色に目がいく。こんな景色に出会うために山に登っているのかなあ、と自問しながら。

登ったり下ったりしながら白毛門着。目の前に谷川岳のトマの耳・オキの耳が見えると期待していたのに、双耳峰は雲の中だ。でも正面に見える白い壁、岩のすごいこと。あれがノ倉沢。昔、ドライヴで見に行ったときを思い出す。今は人影も見えない。谷川岳から見たときに、向かい側が白毛門と教えられて、いつかは行つてみたいと思いつけていた白毛門。今のような縦走ができたことに感謝だ。ただ空中散歩を思い描いていた景色は霧で堪能できず、ちよつと五里霧中？の山行だった。

それにしてもよく歩いた。私のスマホによれば、1日目(12日)は16・2km、2万2375歩、106階相当。2日目(13日)は16・7km、2万6004歩、180階相当。3日目(14日)は15・2km、2万4593歩、79階相当。まだまだがんばれるのが分かった山行だった。

ありがたい、皆さま。

(埼玉支部 東 洋子)

年次晩餐会記念親山行 「石割山登山」に参加して

12月2日(日)、早朝ということもあって、新宿といえども静かで朝の空気が気持ち良い。今日は、初めて記念山行に参加する。石割山は、富士山と山中湖がよく見える山ということで心ワクワク、楽しみにしていた。集合場所では山行委員会の方が早朝から待機してくださり、とてもありがたかった。集合時間になつてもJRのトラブルで20人以上が到着されていないので、少し出発時間を遅らせて皆さんを待つことにした。

8時30分、残念なことに10人ほどの方が集まらなかったが、この先のスケジュールを考えるとぎりぎりということで、バスは石割山に向けて出発。途中渋滞もなく、首都高・中央道とスムーズ。目的地に近づいてきたところで車窓に富士山が現われた。雪をいただいた富士山に思わず「おー！」と歓声が上がった。美しい富士山を見ながらの登山に一気に期待が高まる。

登山口の赤い鳥居から真っ直ぐに延びる400段の石段でウォーミングアップしながら頂上を目指



石割山頂での記念撮影

す。家族連れの登山客も多く、狭い石段で長い列が続く。さすがだ。皆さん400段の石段も難なくすいすい登っていかれる。石段を制覇したら石割神社で、ご神体の石を皆で回ってお参り。本当は3度回るところ1回で先を急ぐ。頂上まで急登が少し続くが、補助ロープあり丸木階段もありで、安全で歩きやすい。落ち葉がいつぱいの冬枯れの山道は、ふかふかしていて足に優しい。頬に感じるピンと張り詰めた冷たい冬の空気が、なんとも気持ちの良い山歩きだ。

そろそろ富士山が見えてきてもういはいはすなのだが、青い空はなく、

どんよりとしたままである。頂上へ着いたところに晴れてほしいと願いながら、ひたすら歩く。20分ほどで頂上へ到着。富士山が見えてくるつもりになって昼食。果物やお菓子をふるまってくださる方もいて、ワイワイと楽しいひととき。昼食後は石割山の碑とともに思い思いに記念撮影。JACのフラッグをかざして集合写真を撮影したら次の展望地である平尾山に向かって出発。結局、富士山は姿を現

わしてくれなかったが、これは「また来年」と楽しみを先に延ばせたのかな、と思いつながら下山。出発が遅れた分は、途中でリカバリーでき、ほぼ予定どおりに帰途へ。国道を少し走ると薄日が差し、夕日をバックにきらきらと輝く富士山が見えてきた。登山中に見たかったが、全国の皆さんと一緒できる記念山行はとても楽しく、また来年も参加したいなと思った。（東海支部 前川みどり）

支部

だより



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

東九州支部 第12回日韓交流登山

韓国山岳会蔚山支部との交流登山は今回で12回目となる。隔年に交互に訪問し合う交流登山を続けてきて、昨年は九重山に韓国側のメンバーを迎え、今年は当方が韓国訪問の順番である。会友も含

めて18名の訪問団が結成され、10月19日から22日までの日程が組まれた。

10月19日(金)、福岡港発の高速船ビートルが荒波で出港停止。代わり「フェリー」に「かめりあ」で釜山港へ向かったが、予定より4時間半遅れで着くというアクシデントで始まる。蔚山市の懇親会場へ着い

たのは夜の8時過ぎ。予定の開始時刻を2時間以上遅れて着いた我々を、蔚山支部のメンバーは皆待つていてくれ、にこやかに温かく出迎えてくれた。昨年10月の九重山以来の再会である。早速交流会と、サムゲタン料理とビールやマオタイでにぎやかに懇親会。

翌20日は交流登山1日目、蔚山市の南の郊外にある大雲山(742・1m)へ登る。登山口からの高度差600m余りの登りだが、道のりが長くて、初めは高をくくっていた我が会参加者も山頂までの遠さにいささか驚く。しかし、快

晴の天気の下、山頂はすばらしい
展望で皆大満足。

翌々日は蔚山市の北の郊外にある舞龍山(450・7m)。日本のどこにでもあるような、都市郊外の低山だ。街外れの園地が登山口で、朝夕の市民登山のコースとなっている。けっこう急な坂道を登れば平坦な公園のプロムナード。展望台は蔚山市西の市街地や、はるか遠くに初回訪問時に登った嶺南アルプスの山並みが見える。そんな散歩道からぐんと下って、標高差200mの登り返しは長い長い階段道。この日も標高から見て軽いハイキングと思っていた我が会員は最後の登りで汗だく。しかし、ここも登り着けば大展望で、快晴の空の下、すばらしい景色を堪能。登山口で韓国のメンバー全員に見送られてバスで帰途に。わずかに2泊3日の日程であったが、今回も韓国山岳会の心のこもったおもてなしに感謝感謝。21日の夕方、釜山港まで見送ってくれた李旭建顧問と淑金喜夫人、4年前に事務局長として雪岳山での交流登山に何くれとなくお世話くださった崔泳植現支部長の3氏に重ねて感謝。

(飯田勝之)

図書受入報告(2018年11月)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
澤田大多郎(編)	龍星閣 澤田伊四郎 造本一路	273p/22cm	龍星閣	2018	発行者寄贈
伊佐九三四郎	山々の財産 : 心に残る山登りを	439p/19cm	山と溪谷社	2018	著者寄贈
マンサク会	鳥海山の自然と生物	222p/21cm	秋田魁新報社	2018	出版社寄贈
中村浩志・小林篤	ライチョウを絶滅から守る!	276p/22cm	しなのき書房	2018	出版社寄贈
佐藤聡史(編)	美しき明治のみづゑ 丸山晚霞展 : 生誕150年 明治150年	96p/30cm	丸山晚霞記念館	2018	発行者寄贈
松澤節夫	山水林人 : 松澤節夫 木口木版画集	69p/20cm	松澤節夫(私家版)	2018	著者寄贈
中川博人(編)	インド・ラダック・パンゴン山脈 マリ山群・マーン峰 6342m (初登頂)	66p/30cm	JAC石川支部	2008	発行者寄贈

☆図書交換会向け出品図書から(出品していただいた書籍の中から下記のことを図書室に入れさせていただきました)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
前芝茂人編	ヴェルカバンパ山群とウルバンパ河	226p/26cm	同志社大学山岳会	1969	会員寄贈
渡部智俱人	九州の山岳 (初版)	372p/21cm	海鳥社	2012	会員寄贈
金子民雄	東ヒマラヤ探検史 (初版)	272p/19cm	連合出版	1993	会員寄贈
星野道夫	アラスカ光と風 (初版)	325p/19cm	福音館書店	1995	会員寄贈
中村みつを	山旅の絵本 (初版)	175p/21cm	JTB	2002	会員寄贈
グァン・シン(著) 野間寛二郎(訳)	エヴェレストの魅惑	261p/22cm	ベースボール・マガジン社	1964	会員寄贈
宇都宮貞子	科の木帖 (初版)	239p/22cm	文京書房	1990	会員寄贈
中野孝次	神々の谷 インド・ガンゴトリ紀行 (初版)	189p/20cm	河出書房	1981	会員寄贈
W.アンスワース(著) 新島義昭(訳)	アルプスは再び征服された (初版)	231p/19cm	森林書房	1976	会員寄贈
伊藤幸司	富士山 地図を手に (初版)	231p/22cm	東京新聞出版	1980	会員寄贈
国際情報社	国際写真情報 INTERNATIONAL GRAPHIC 2 1954 Vol.28 No.2	/37cm	国際情報社	1954	会員寄贈
わらじの仲間(編)	わらじ 年報4 1980	145p/26cm	わらじの仲間	1980	会員寄贈
わらじの仲間(編)	わらじ 年報11 1987	199p/26cm	わらじの仲間	1987	会員寄贈
わらじの仲間(編)	わらじ 年報12 1988	223p/26cm	わらじの仲間	1988	会員寄贈
Greiner, James	Wager with the Wind : The Don Sheldon Story	256p/24cm	Rand McNally	1974	会員寄贈

寄附金及び助成金などの受入報告 (平成30年10月31日まで)

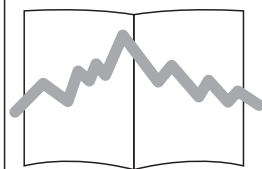
寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
清登 緑郎 会員	10	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
河西 瑛一郎 会員	30	視覚しょうがい者登山全国大会
落合 正治 会員	30	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
(株)リクルートキャリア	50	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
麗山会	2	日本山岳会運営費用
松本 敏夫 会員	10	山のマナーノート
佐野 忠則 会員	500	日本山岳会運営費用
梶 正彦 会員	1,000 2,000	創立120周年記念事業費用 日本山岳会運営費用
北村 武彦 会員	10	図書管理費の寄附
歳弘 逸郎 会員	10	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
松原 尚之 会員	10	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
瀧島 清 会員	30	有志からのご寄附のお願いに対する永年会員からのご寄附
一般社団法人 獣害対策支援センター	30	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
江川 知史 会員	10	視覚しょうがい者登山全国大会
森 武昭 会員	10	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
三宅 悠介 様	10	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
智和 譲 様	2	山のマナーノート
日本山岳会 東京多摩支部	1	山のマナーノート
安井 康夫 会員	10	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
東 政孝 会員	300	YOUTH CLUB 運営費用



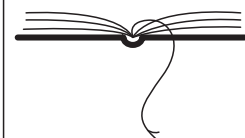
2018年9月
しなのき書房
A5判 276頁
1800円+税

ライチョウを絶滅から守る

中村浩志・小林篤著



図書紹介



ニホンライチョウという鳥をご存じだろうか。日本山岳会の会員であれば、ライチョウを見たことがなくても、知らない方はいないだろう。ニホンライチョウは氷河期の遺存種、生き残りと言われ、国の特別天然記念物で、2012年からは絶滅危惧種ⅠB類に指定されている鳥である。

本書はこのライチョウの生体、現況、課題と今後について知ることが出来る本である。著者の中村浩志氏は信州大学でライチョウ研究の第一人者として活躍され、信州大学教授を退官後、自ら中村浩志国際鳥類研究所を立ち上げ、現在まで現地での調査、研究、保護活動が続けられている。

共著者の小林篤氏は信州大学大学院で修士、東邦大学大学院にて博士号を取得され、現在は東邦大学理学部訪問研究員として中村氏とともに研究活動をされているライチョウ研究者である。中村氏のライチョウに関する著作は3冊目

であるが、今作ではもちろん最新の調査、研究内容が掲載されている。

第1部から5部まではライチョウの生体について詳しく語られている。第4部ではライチョウが危機的状況に置かれていることが述べられていて、暗澹たる気持ちになる。後半の第6部から9部は今作の白眉である。2015年に放映されたNHKの「ダーウィンが来た」の「ライチョウを守れ! ボディーガード大作戦」を見た方もおられると思うが、第6部では、この「ボディーガード大作戦」シリーズの取り組みについて詳細に語られている。

第7部では、現在最も絶滅が心配されている火打山での状況。第8部では、動物園での人工飼育についても書かれている。第9部では、中村氏と小林氏による最大の発見について書かれている。その内容はぜひ本書を読んでみてほしい。「ライチョウを絶滅から守る」、ストリートなタイトルネームである。しかし、そのネームに恥じぬ中村、小林両氏のライチョウへの強い思いが伝わってくる本である。

(自然保護委員会 日吉健治)



平成30年度第7回(11月度)理事会 議事録

日時 平成30年11月14日(水)19時00分～20時29分

場所 集会所

【出席者】小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・

古川・谷内各常務理事、清登・齋藤・星・近藤・波多野各理事、平井・石川各監事(所用のため中山理事は

報告事項1まで欠席)

【欠席者】安井理事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・寄附受入の承認について
寄附受入および管理規程第3条により100万円の寄附3件について審議した。(賛成12名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・職員介護休業規程(C-33)の改定について(近藤)

職員介護休業規程(C-33)(介護短時間勤務) 第12条の改定について協議した。

【報告事項】

1・岩手支部登山教室指導者講習会について報告があった。(重廣)

2・入会希望者10名、復活入会希望者2名、準会員入会希望者5名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)

3・審議事項1において承認された3件を含む寄附金14件の受領について報告があった。(古川)

4・山研の閉所作業および受水槽取替え工事について報告があった。(野澤)

5・青年部チャムラン登山隊の帰国について報告があった。(野澤)

6・家族登山普及委員会の活動について報告があった。(波多野)

7・「山」11月号の発行について報告があった。(神長)

【連絡事項】

1・支部連絡会議の事前質問の集約状況について(永田)

2・年次晩餐会について(永田)

【今後の予定】

1・常務理事会・理事会

・平成30年度12月度常務理事会
12月4日(火)18時30分～

・平成30年度12月度理事会
12月12日(水)19時00分～

2・支部連絡会議 12月1日(土)10時30分～12時00分 京王プラザホテル

3・年次晩餐会 12月1日(土)12時30分～(受付開始)京王プラザホテル

4・事業計画・予算等

・平成30年12月初旬 平成31年度支部事業計画・予算(提出依頼)

・平成31年1月中旬 平成31年度支部事業計画・予算(提出期限)

・平成31年1月下旬 平成30年度支部事業報告・会計報告(提出依頼)

・平成31年2月下旬 平成30年度支部事業報告(提出期限)

・平成31年3月下旬 平成30年度

支部会計報告(提出期限)

ルーム目誌

11月

9日	支部事業委員会	Y O U T
8日	常務理事会	資料映像委員
7日	記念事業委員会	山行委員
6日	図書委員会	スケッチクラ
5日	総務委員会	バックカント
4日	リークラブ	
3日	山岳研究所運営委員会	フ
2日	山岳研究クラブ	スキー
1日	山岳研究クラブ	スキー
19日	総務委員会	資料映像委員
18日	資料映像委員会	Y O U T
17日	自然保護委員会	Y O U T
16日	H C L U B	
15日	科学委員会	みちのり山の
14日	休山会	山想倶楽部
13日	理山会	国土地理院WG
12日	オトクラブ	スケッチクラブ
11日	山岳研究クラブ	スキー
10日	山岳研究クラブ	スキー
9日	山岳研究クラブ	スキー

平成30年度 第8回登山教室指導者養成講習会案内
日本山岳会支部事業委員会
委員長 宮崎紘一

登山教室・リーダー育成事業援助として、必要な知識と技術を学ぶ指導者養成講習会を昨年に続き安藤百福センターで開催します。登山のすばらしさと安全な登山を実践できる資質を具えた会員の増強、および支部活動の一層の発展を目的として、積雪期登山技術講習を以下のとおり行ないますのでご参加ください。

主 催 公益社団法人日本山岳会 支部事業委員会
日 時 平成30年2月16日(土) 13:00集合・講義
17日(日) 水ノ塔山で実技講習後16:30解散
場 所 安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター
小諸市大久保1100(J R小諸駅よりタクシー 10分)
費 用 1万円(概算) 宿泊費・食事2食・現地交通費・資料代を含む
*参加者の人数により現地交通費(貸切バス代)が変わる可能性があります。なお、参加費は受付時に集金します。

内 容[座学講習]
・遭難防止と山岳遭難救助活動(仮題) 講師=長野県警察山岳救援救助隊
・登山における積雪と雪崩の基礎知識 講師=飯田 肇(立山カルデラ砂防博物館、国立登山研修所専門調査委員)
・登山教室実施要項 講師=重廣恒夫副会長(支部事業委員会担当理事)
(夕食後講師を囲んでの懇親会を予定しています)

[実技講習]
・水ノ塔山登山と実技講習(セルフレスキュー) 講師=川瀬 恵一(日本山岳会遭難対策委員長)
参加資格 日本山岳会会員で、支部山行・登山教室のリーダーを目指す者。山岳保険に加入している者。
募 集 20名 平成31年1月31日(木) 定員になり次第締切ります。
締切り 別紙申込書に記載し、メールにて下記までにお送りください。
申込み 問合せ先 支部事業委員会 中村哲也まで。
eメール jac-shibu@jac.or.jp
その他 実技講習日の昼食および雪山登山装備は各自持参してください。

20日	総務委員会	山行委員会
21日	科学委員会	スキークラブ
22日	総務委員会	会報編集委員
23日	Y O U T H C L U B	
24日	三水会	つくも会
25日	総務委員会	公益法人運営
26日	委員会	フォトクラブ 山
27日	遊会	
28日	総務委員会	財務委員会
29日	青年部	
30日	総務委員会	遭難対策委員
31日	平日クラブ	
1日	総務委員会	家族登山普及
2日	委員会	00会 麗山会
3日	総務委員会	
4日	総務委員会	山の自然学研
5日	研究会	
6日	11月来室者	499名
7日	川上伸生(10092)	18・11・13
8日	原島正樹(12379)	18・10・28
9日	寺田新一(12826)	18・11・7
10日	退会	
11日	進藤 弘(12533)	
12日	松田政男(12854)	
13日	十川むつ子(13065)	宮崎
14日	黒田 真(13063)	広島

◆編集後記◆

●11月は甲斐の山々を歩くつもりでした。初日は櫛形山で、2日目は七面山、泊まりは下部温泉という計画です。ところが、文化の日の朝に出発したのが失敗でした。初日の櫛形山は渋滞による時間不足で急遽、飯盛山に変更。下山後、2日目に備えて南下し、予約してあった下部温泉に泊まりました。

●ところがなんと、2日目の天気予報は山梨県南部が雨、北部や長野県なら晴れ間が見えるだろうとのこと。七面山も諦め、予報を信じて一気に北上、霧ヶ峰を歩いてきました。まさに大本営発表のごとく「転進」に次ぐ「転進」。こんな山歩きをしていると、「イージーな山ばかり選んで、ポーッと歩いてんじゃねーよ!」とチコちゃんに叱られそうです。

(節田重範)

日本山岳会会報 山 883号

2018年(平成30年)12月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重範
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社